

≡ 「身」も「心」も ≡

小松原 有子

(広島大学大学院博士課程前期)

大学院の和歌の演習で、『六百番歌合』「初恋」三番の二首、

左歌

有家朝臣

日を経とも人の心のつれなくは恋ばかりにや身を尽すべき

右歌

家隆

いつしかと通ふ心の今はさは嬉しかるべきしるべともがな

を担当した際、古典和歌における「身」と「心」の描かれ方に興味を持った。

とくに右歌においては、「心」は「身」を離れて相手の元へ通うもの、「身」に先行してしるべとなるものとして表現されている。

これらの和歌のように、「身」と「心」とを分離したものととして詠じた和歌は多くあるが、それらの作品の中でそれぞれの関係がどのように描かれ、どのような表現が生み出されているのかみていきたいと思う。

（ ）内の訳は、日本古典文学大系・新日本古典文学大系を参考にした。

（ ）内の数字は『新編国歌大観』での整理番号。

一、「万葉集」における「身」と「心」

天雲之 あまぐもの 外徒見 まよひにまより 吾妹尼尔 わが妹にこに 心毛身副 こころもみらみ 縁西鬼尾 よりのにむら

(万葉集・卷四・五五〇(五四七))

へ(天雲を見るように)遠くに見た時から、あの子に心も身もすべて(心も、更に身までも)寄り添ってしまったよ。)

熊野之 くまのの 浦乃浜木綿 うらのほまゆふ 百重成 ももへなす 心者雖念 こころはおもへど 直不相鴨 ただばあはむかひ

(万葉集・卷四・四九九(四九六))

へみ熊野の浦の浜木綿の花、その白波にもまがう白い花のように、幾重にも心では思うけれども、直接には(この身は)逢わないことよ。)

「天雲之……」では、「心」と「身」とは別のものとしてそれぞれ存在している。また、「心」と「身」の両方がそろって初めて自分の全てとなるようである。

「熊野之……」においては、心では、直接には(身では)と、「心」と「身」の不調和が見つめられている。

これらの和歌のように、「万葉集」において既に「身」と「心」は別々のもの、時として乖離して不調和な状態に陥るものとして描かれていることがわかる。

次に、それ以降の例も見ていきたいと思う。

二、分離する「身」と「心」

人を思ふ心は我にあらねばや身の迷ふだにしられざるらむ

(古今和歌集・恋一・五三三・よみ人知らず・「題しらず」)

へ人进行「心」というものはわたくし自身ではないので(わたくしのところにはないので)、そのわが身が迷い乱れることさえも分からないのでしようか。)

身はすてつ心をだにもはふらさじつひにはいかなるとするべく

(古今和歌集・雑体・一〇六四・興風・「題しらず」)

へ身は捨てた。せて心の方はかりは投げ放らせまい。最後にはどうなるかと知ることができるよう。)

思ひやる心にたくふ身なりせばひと日にちたび君はみてまし

(後撰和歌集・恋一・六七八・大江千古・「題しらず」)

へあなたに思いを馳せるその心と一体になる我が身であったならば、一日に千度でも、あなたを見ることのできるのだが。)

かずならぬ身は心だになからん思ひしらずは怨みざるべく

(拾遺和歌集・恋五・九八四・「題しらず」)

へ人数にも入らないこの身は、いっそ心さえもなければよい。相手の冷淡さが分からなければ、恨むこともなくなるように。)

きみこふる心は千々にくだくるをなどかずならぬわが身なるらん

(好忠集・恋・四一六・「題しらず」)

へあなたを恋慕う心はちちに砕ける程なのに、どうしてわが身は、物の数でもないものであるのだろうか。

心にもあらぬわが身のゆきかへりみちのそらにてきえぬべきかな

(新古今和歌集・恋歌三・一一七〇・道信朝臣・「題しらず」)

へ心と共にわが身の行き帰りよ。帰る途中でこの身は消えてしまいそうだな。

月の行く山に心をおくり入れてやみなるあとの身をいかにせん

(新古今和歌集・雑歌下・一七八一・西行法師・「題しらず」)

へ月の傾く山に月を慕って、心を一緒に送りこんだのはよいとして、間に留まっている残されたこの身の方はどうしようというのであろう。↓月に耽溺する心あるいは風雅が、一身の救済に繋がるのかという切実な自問。

三、「身」と「心」の特徴

それでは、「身」と「心」は、それぞれどのような特徴(行動)をもつて分離・乖離するのだろうか。

おもへども身をしわけねばめに見えぬ心、を君にたくへてぞやる

(古今和歌集・離別歌・三七三・伊香子淳行・「東の方へまかりける人に、よみて、遣はしける」)

へあなたを思いはするけれど、このわが身を分けられないので、目に見えないわが心をあなたにつれ添わせてやるのですよ。

よそにのみ恋ひやわたらむ白山の雪みるべくもあらぬわが身は

(古今和歌集・離別歌・三八三・「越国へまけりける人に、よみて、遣はしける」)

へ遠く離れてずうっと恋い続けるのでしょうか。越の国の白山の雪を、出かけて行つて見ることができはるはずもないわたくしの身は……

よるべなみ身をこそとほくへだてつれ心は君が影となりなき

(古今和歌集・恋三・六一九・「題しらず」)

へ寄りかかつて頼りにするところもありませんので、わが身を遠く引き離しておりますけれど、心はとつくにあなたに寄り添う影となつております。

白雪のともにわが身はふりぬれど、心はきえぬ物にぞありける

(古今和歌集・雑体・一〇六五・千里・「題しらず」)

へ白雪が降ると共にわが身は古びてゆくけれど、心の方は白雪のように消え去らないものであるよ。

身ははやくなき物のごと成りにしをきえせぬ物は心なりけり

〔後撰和歌集・雑三・一二二三・伊勢〕「昔おなじ所に宮仕へしける人、〔年ごろ、いかにぞ〕などとひをこせて侍りければ、つかはしける」

〔我が身は早く無い物のようになってしまっていたのですが、それでも消えないものはあなたに對する私の心でありますよ。〕

こひしさはおもひやるだになぐさむを心におとる身こそつらけれ

〔後拾遺和歌集・恋三・七二二・藤原国房〕「遠き所なる女につかはしける」

〔恋しさは遙か思いを馳せるだけでも慰むものなのに、心のように遠くへ送ることができないという点で劣るこの身は、つらく思われるよ。〕

おのが身のおのが心にかなはぬを思はばものは思ひしりなん

〔詞花和歌集・雑上・三二〇・和泉式部〕「たがひにつ、むことある男の、たやすく逢はずと恨みければよめる」

〔自分の身が自分の心のとおりにならないということを考えてたならば、事情はよくわかるでしょうよ。〕

とし月はわが身にそへて過ぎぬれどあおもふ心のゆかずもあるかな

〔新古今和歌集・恋歌一・九九九・西宮前大臣〕「九条右大臣のむすめに初めてつかはしける」

〔年月はわが身とともに過ぎてしまったが、あなたを慕う心は

そのまま胸の中に沈んで、まだ思いを晴らすこともできずにいることだ。〕

これらの和歌に描かれている「身」と「心」の特徴を表にすると次のようになる。

「心」

〔自由〕

〔その場へ思いを馳せる。〕

〔行く〕ことができる。

〔身〕から離れることが可能。

自由に行動できる。(思いどおり)

思う人に逢える。

思う人の側にいることができる。

〔不可視〕

〔不変不滅〕

古びない。

消え去らない。変わらない。

「身」

〔不自由〕

〔身はことごとくに分離できない。〕

〔行く〕ことができず「留まる」。

遠くへ行けない。

思いどおりにならない。

思う人に逢えない。

思う人から遠く離れている。

〔可視〕

〔必変・必滅〕

時間と共に古びる。

いずれ消え去る。

四、夢路に通う「心」

古典世界の夢のとりえ方は今とは違い、夢に見るかどうかは相手の思いの丈次第とされていたようだが、そこにも「心」と「身」の分離が前提とされていて、人を思うからこそ「心」は「身」を離れその人に逢いに行き、思われている人は自分を思ってくれている人を夢に見ることができるといふことであつたのだろう。

かぎりなき思ひのまゝ、に夜も来む夢路をさへに人はとがめじ

（古今和歌集・恋二・小野小町・五六七・「題しらず」）

〈尽きることのない恋の思いに従つて、その思いの火をたよりとして夜の夢ではきつと逢いに来て下さるでしょうね。夢の中の通い路を通うことまで他人はとがめだてしないでしよう。〉

五、思いどおりにならない「心」

また、これらの特徴を踏まえていると思われるが、これらと反するようによ詠まれている和歌もある。

身をすててゆきやしにけむ思ふより外なる物は心なりけり

（古今和歌集・雑歌下・九九七・躬恒・「人を訪はで久しう

ありける折に、あひ怨みければ、よめる」）

〈わが身を捨ててわが心があの人の所へ行つてしまつたのだら

うか。思うにまかせないのは「身」なのだとはかり思つていたが、実は「心」であつたのだ。〉

ともすればよもの山べにあくがれし心に身をまかせつるかな

（後拾遺和歌集・雑三・一〇二〇・増基法師・「修行に出で

立ちける日よみて、右近の馬場の柱に書き付け侍りける」）
〈へかかというところちの山辺にさまよい出ようとしたり心にこの身をまかせたのだ。〉

「心」は自由であるが故に、意志からも自由であることもあるようである。「心」は無意識にも、「身」から抜け出して遠くへ行つてしまふこともあるようだ。

六、情緒を解する「心」

「心」＝感情であるから、「心」には情趣を解するものといふ意味もある。

心なき身は草木にもあらなくに秋くる風にうたがはるらむ

（後撰和歌集・雑四・一一七四・伊勢）

〈情趣を解し得ない我が身は、草木ではないけれど、まるで草木が枯れさせられるように、離れさせられるのではないかと心配しています。〉

心なきわが身なれども津の国のなにはの春にたへずも有るかな

〔千載和歌集・春歌下・一〇六・藤原季通朝臣・「題しらず」〕

〈ものゝあわれを解する心のない思かな我が身ではあるが、津の国の難波の春景色の美しさには、感動して堪えられない思いであるよ。〉

はなにそむ心のいかでのこりけんすてはててきとおもふわが身に

〔千載和歌集・雑歌中・一〇六六・「花の歌あまたよみ侍ける時」〕

〈花に執着する心がどうして残ったのだろうか。もうすっかり俗世間での感じ方を捨て切ってしまったと思っっているわが身に。〉

恋しきまにうきもつらきも忘れられて心なき身に成りにけるかな

〔長秋詠藻・恋・七七・「題しらず」〕

〈恋しさのあまり、憂いこともつらいことも自然に忘れてしまつて、情趣をわきまえない身になつてしまつたよ。〉

心なき身にもあはれはしられけりしぎたつ沢の秋の夕暮れ

〔新古今和歌集・秋歌上・三二六二・西行法師・「題しらず」〕

〈あわれなど解すべくもないわが身にも今それはよく分かることだ。鳴の飛び立つ沢辺の秋の夕暮よ。〉

これらの和歌において、「心」は情趣を解するもの、情趣を求め

るもの、情趣をわきまえるものとして詠まれている。「心」は人間としてあつてほしいものであり、逆に出家した「身」には捨てたはずのもののようなのである。

七、「身」と「心」との関係

和歌は主に感情を表現するものであるから、感情である「心」は、感情のない「身」より優位なものであるという印象も受ける。自由↓↓不自由といった関係からも、「心」は「身」より優位であり望まれるものなのだろうか。

かさどりのやまによをふる身にしあればすみやきもをるわが心かな

〔金葉和歌集・恋部下・四九七・よみ人しらず・「題しらず」〕

〈炭竈のある笠取山に住んで世を過ごしている身なので、炭焼く人がいるような焼け焦がれる我が心であるよ。〉

うき身をわたすときけばあまをぶねのりに心をかけぬひぞなき

〔金葉和歌集・雑部下・六三九・懷尋法師・「薬王品の心をよめる」〕

〈我が憂身を彼岸に渡し済度してくれると聞いているので、法華経という小舟に心をかけない日はないよ。〉

かずならで心に身をばまかせねど身にしたがふは心なりけり

〔千載和歌集・雑歌中・一〇九六・紫式部・「題しらず」〕

「私は物の数でもない存在なので、意志のままにこの身を処すことはできないけれど、それとは逆に身の上に従つて押し流されてしまふのは心だったのですね」

草の庵に心はとめついつか又やがてわが身もすまんとすらん

〔長秋詠藻・雑歌・三六三・「ひごろこもりて出づる日、こもりたる僧の庵室の障子にかきつけ、る」〕

「あなたの草庵に心を深くきざみこみました。いつかまたそのうちに私もこういう庵に住もうとするでしょう。」

にこりなくきよき心にみがかれて身こそすみの鏡なりけれ

〔長秋詠藻・釈教歌・四二二・「法師功德名 又如淨明鏡 添見諸色像」〕

「濁りなく清い心にみがかれたからだこそ、よく澄んだ鏡である。」

すてやらぬわが身ぞつらきさりととも思ふ心にみちをまかせて

〔新古今和歌集・雑歌下・一七七〇・左近中将公衡・「述懐の心」をよみ侍ける」〕

「この世を捨ててしまえない自分が真実堪えがたく思われる。それでももしやと思う未練な心に引きずられて。」

これらの和歌に見られるように、「心」と「身」は、ただ背反するものであるだけでなく、お互いに影響し合うこともあるようである。

る。「心」は自由に動くことができるからこそ先行し、「身」のしるべとなることができるのであろう。また、「身」はそのあまりの不自由さに、「心」までも縛りつけてしまふこともあるのだらう。

八、希わしき調和——「しるべ」としての「心」——

「心」と「身」は、このように分離した形で詠まれるが、一方、それを前提として調和・合一を求める心情を詠じた歌も多く、お互いを引きつけ合っているような印象も受ける。

したはれてきにし心の身にしあれば帰るさまには道もしられず

〔古今和歌集・離別歌・三八九・藤原兼茂・「今はこれより 帰りねと、実が言ひける折に、よみける」〕

「あなたをひたすらお慕いする思いにまかせてこうして送りに参ることになってしまった、その心があつてこそそのわが身でするので、(心をここに)とどめたわが身は、帰るのに道もわかりません。」

いなせともいひはなたれずうき物は身を心ともせぬ世なりけり

〔後撰和歌集・恋五・九三七・「親のまもりける女を、「否とも、諾とも言ひ放て」と申ければ」〕

「否とも諾とも言い切つてしまふことができないほどにづらいのは、親に見守られていて我が身が我が心のままにできない状況でありますよ。」

あはれとしおもはむ人は別れじを心は身よりほかのものは

(千載和歌集・離別歌・四八九・「筑紫にまかりける男、京に上るとて門出のところより女のもとに、上るべき心地なむせぬなどいへりける返事につかはしける」)

へほんとうに哀れと思つて下さる人なら、別れては行きはすまいものを、あなたのお心は、その身とは別のものでしょうか、そんなことはないでしょう。)

そむきても猶うき物は世なりけり身をはなれたる心ならねば

(新古今和歌集・雑歌下・一七五二・寂蓮法師・「守覚法親王、五十首歌よませ侍けるに」)

へ世を捨てたとてやはり心を悩ますものはこの世だな。心は身を離れてあるものではないので。↓心は身を離れず、身はこの世を離られない理。)

本来は、「身」と「心」が一緒にあることが理想なのではないだろうか(恋歌においてはもちろん思う人の側で)。そのような考えから、出家した「身」には「心」を強い意志で引きつけておかなければならず、それなのにあくがれいづる「心」というものが詠まれるのであろう。

しかし、現実には結局「心」は「身」と一緒にあるものであると思う。「心が通う」のは結局思いを馳せることの比喩であって、実際に「心」が思う人についていってその人の行動を見たり聞いたりできるわけではない。そういう前提があるからこそ、

せめて「心」だけでもついて行きたい。

←
できることなら「身」も「心」と共について行きたい。「心」にするべをさせて。)

ということになるのだと思う。

現代では、「心」は「身」の中にあつて、「身」の一部、というような印象が私たちにはあるけれど、「心身共に」「身も心も」「心もからだも」というような表現が使われているところからすれば、昔と変わらず別物であるという意識もどこかにあるのかもしれない。

*

参考までに、ここまで見てきた「身」と「心」の描写が現代短歌に引き継がれていると思われる例を挙げておく。

「万智ちゃんがほしいと言われ心だけついていきたい花いちもんめ」
(依万智「サラダ記念日」河出書房出版 一九七八)

「どこまでもついてはいけない
使者としてかみのけいっぽん遣わしましょう」

(林あま里「ベッドサイド」新潮社 二〇〇〇)